



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT2 1478

このコンサートはイギリスの出版社オーナーで、社会人道主義者としても音楽愛好家としても知られるサー・ヴィクター・ゴランツ(1893-1967)のために開催されたものだ。影響力の大きいレフトハンドクラブの創始者として知られるゴランツは、自身の出版社を1927年に創設した。後にこの出版社は、左派とアメリカの書籍の出版に特化された。ゴランツ自身も多作な作家であり、政治や人道主義関係の著書に加え音楽に関係した著作もある。彼の生涯は一風変わった宗教を通して語られることが多い。ユダヤ教徒として生まれ、この教義に彼独自のキリスト教的要素や他の宗教を取り込んだものだった。この信仰が人権擁護の活動の原動力となっている。ゴランツの主な活動は、当初死者600万人とも言われた第二次大戦中のナチによるユダヤ人被害者の救済と、戦後は、陸軍元帥モンゴメリーが提唱したプランに異議を唱えドイツ市民支援物資の増加のために尽力したことなどが挙げられる。(モンゴメリーのプランでは一人あたりの食糧配給量は戦時中の集中キャンプとさほど変わらなかった。)

「音楽は被害を受けなかった唯一のものだ。」ゴランツは死の直前までつけていた日誌に書いている。「音楽はいつまでも新鮮で崇高であり続けられる唯一のものだ。音楽こそが私の人生の核であり中心である。どんな攻撃にも侵されない。」実際、少年の頃からコヴェントガーデンにオペラ鑑賞に通い、彼の甲高い声での音楽評論は有名だった。「神様！あの歌手(有名なソプラノ)はメルバ以上に愚鈍だ」「下劣なけだもの！」(ピーター・ホール演出のシェーンベルクの《モーゼとアロン》で舞台上に大量の血が流されたのを見て)しかし彼は新人歌手の目利きでもあり、若き日のギネス・ジョーンズやジャネット・ベイカーに惜しみない称賛も与えている。1964年出版の著書“音楽への旅”では、当時のオペラ演出が贅沢で説明的過ぎる

という持論を展開している。この論点は **Observer** 紙が 1965 年のヴィーラント・ワグナーによるバイロイトの指環チクルスに対する評を送ってきた際に増幅した。ゴランツの評論は後に“バイロイトのリング”という本として出版され、この本には礼儀正しくはあるものの舞台監督とは意見が対立したインタビューが掲載されている。

このメモリアル・コンサートでのレパトリーはゴランツの未亡人であるルースと娘のリヴィアにより選定された。ゴランツのお気に入りだった作曲家はヴェルディを除きほとんど含まれている。コンサートは友人であった **Observer** 紙の音楽評論家ピーター・ヘイワースの感謝の言葉で始まった。これに続きゴランツ自身が著書で述べている音楽演奏論が引用された。ニュー・フィルハーモニア管の信託協会はプログラムの 1 ページを割いて‘60年に渡りコンサートに通い音楽へ多大なる貢献をした人物への追憶’と‘1964年、一切のためらいもなく新設されたオーケストラと合唱団、その後援団体への援助を生涯に渡って約束してくれたことに対する心からの感謝’と題された 2 つの記事を掲載した。

ゴランツは、1957年のフィルハーモニア管の最初のベートーヴェン・チクルス以降、クレンペラーのコンサートを欠かさず聴いていた。（ベートーヴェン・チクルスの最終日にゴランツはクレンペラーに月桂冠を送っている。）「その夜に疑うことを止め、その後一切疑ったことはない。」ゴランツは書き残している。「クレンペラーは私がいままで聴いたことのあるどの指揮者よりも優れたベートーヴェン指揮者である。実際、現代の指揮者のほとんどを私は聴いている。同等の演奏がもうひとつあった。ワインガルトナーである。理由は本質的でシンプルな要因に寄るものだ。リズムの正確さ、効果を狙って曲解されていない繊細なフレージング、‘どこに主旋律が存在しているのか’への理解、過度な強調に誘惑されることが一切ないこと、そして全体像を損なうことなくスコアから細部を引き出す能力である。そしてもうひとつ、誇張を嫌う彼の潔癖さだ。」

ゴランツの趣向に沿ったプログラムはベートーヴェンのレオノーレ序曲第 3 番で終わるのだが、この部分のみ録音テープが存在しない。クレンペラーはベルリオーズ演奏のスペシャリストとしては認識されていなかったが、晩年の 5 年間で幻想交響曲を録音しコンサートでも披露している。クレンペラーの幻想は巨匠風の寛大さがまったくなく、ゴランツの言うところの‘本質的でシンプルな要因’と調和する。それどころか、20年後のオリジナル楽器での演奏さえ予感させるものである。この演奏と同様の率直な方法で演奏された《ロメオとジュリエット》の第 3 部‘愛の場面’では、クレンペラーのストラスブル時代に戻ったかのようだ。プフィッツナーの門人でもあったストラスブル時代、この地での幻想交響曲の全曲初演を行っ

たのもクレンペラーだった。1933年のエリザベス・シューマンに宛てた手紙の中で、クレンペラーはこの作品中の‘女王マブのスケルツォ’を‘実に完璧な作品’と述べている。ゴランツは“音楽への旅”の中で‘愛の場面’について‘人生における悲劇的なシーンこそベルリオーズの真骨頂でありエロスとアガペーが混じり合っている。激しい情熱は若き恋人たちの特徴であるが、この激しさは恋人たち二人だけでなく、知覚できる世界全体をも一瞬にして飲み込んでしまう。無限の愛、無限の美...すべての要素を備えた愛の音楽としてこの作品以上のものは見当たらない。この壮大なる美しさに心酔して、夜明けまで眠れなかった。これは足の悪い人が歩き出し、天国まで飛んで行けるようにしてしまう音楽だ。』

シューベルト、ベートーヴェンとモーツァルトはクレンペラーにとって旧知の友である。《未完成》やベートーヴェンの作品は1920年代にベルリン国立歌劇場管と録音しているし、60年代にはフィルハーモニア管と再録音もしている。ゴランツはシューベルト作品にはそれほど興味がなく、晩年の日記には「今まで考えもなく見落としてきたものが、私に最大の喜びを与えてくれるとは！例えば、未完成交響曲。今までこの曲は単なる娯楽として聴いてきた。どちらかというと古臭いイメージがあったくらいだ。今、この曲は天からの贈り物の様に思える。」コンサート・プログラムではレオノーレ序曲第3番に関しても彼自身の言葉が引用されている。「《フィデリオ》は大好きなオペラだ。」さらに、“音楽への旅”の中の秀逸なモーツァルト批評も掲載されている。「《魔笛》は《フィデリオ》に匹敵する...しかし、おそらく《フィガロの結婚》はそれらを上回る。誰もがケルビーノだと思っているところへスザンナが鍵のかかっているドアから出てくる場面など、この音楽は慈愛に満ち溢れていて、最後には神の摂理に到達してしまうのだ。」

コンサート・プログラムの最後は、1952年発刊の自叙伝的短編“愛しのティモシー”の中でゴランツが音楽を称賛した一節で結ばれている。「こんなにも神の存在の‘証明’に囲まれているが、誰ひとり音楽にそれを認めないのはなぜなのだろう？音楽は他のどんな芸術ジャンルより擬態や模倣が多い。ベートーヴェンは何一つ発明してはいない。彼は、何かを感じ取ってそれを再生しただけなのだ。それはどのように生じたのだろうか？その中でベートーヴェンは何を再生しようとしたのだろうか？例えば変ホ長調の四重奏曲では？これらの問いに‘偶然だ’と答える人がいるだろうか？」

Mike Ashman, 2012

訳：小林茂樹